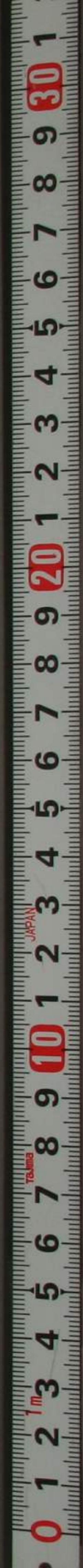


花傳巻八

特別  
子12  
3606  
8





まる警古の糸、大形は巻よ志る、其凡能藝を  
 たり、あまんと思ふ人、才一のいまり、めあや  
 才一り、好氣博奕、大酒三重戒、乃古人持たや  
 警古いつも、道浄穢い、あやま風姿花傳り、  
 をわて、大才七歳をもらて、うーめとす、は比の  
 終のけい、こりあ、うけ、其抱い、自然と、次才り、  
 こも、にゆ、ころ、風評、あ、あ、し、舞、た、こ、う、き、乃、昌  
 音曲、ゆ、い、つ、う、ま、序、り、あ、と、ま、も、あ、と、志、ひ  
 い、こ、う、さ、ら、ん、を、ま、う、せ、せ、こ、う、ろ、の、ま、く、よ、せ  
 さ、ん、へ、し、さ、の、も、う、あ、と、な、ゆ、へ、う、の、  
 あ、ま、り、よ、う、こ、う、さ、む、ま、い、さ、う、せ、へ、い、氣、を  
 う、あ、ひ、て、の、よ、も、の、く、さ、く、な、わ、ら、う、あ、ま、い、

横山家藏

解くて能いとまるなわく高曲うらきまひ  
あそびくしてささまへわひさのそらもの  
まよたとひまへともをへまきなりわ  
大庭なまの申樂よはらへ三番四番此  
時分乃よりせまるふはらん風神さまへし

十二三景

一 此年け了らりいさやうく勢も  
洞子りわ能もくろけくろあま  
次第くも物敷をもをへま言形  
あまい何とくる事も幽玄なわ了急自在  
なり二乃たよりあまい日あき事いかくれ  
ふき事いひあく花めぐるおかりちこれ

さあわくよさのこまのなる物まよあといせ  
さまへい苗度も似合と終もあくぬさ  
なりく堪能よなりあまい何とくるもよ  
りあへちことしひ了急とつひ志りも上  
あといあふらううへきさわあは花い  
まよの花よはあひく時分乃らあなり  
はまいば時分れけいこまへてくやすき也  
さあわよ一節の能乃さこめよは成まき  
なり終藝古やまきとろあ花よあてくわさ  
なもちやく小音曲をも文字よさいくと  
あこり舞をもよあさくあてちううて藝古  
まへ

十七八景

一 ばくろいあまわり乃るすりよて響古くはゆ〜  
先かろかりりぬまい牙一の花うせたりあま  
こ〜たうふなりたままいかわうきてた〜ころめ  
ぬまい氣をう〜るふ結白足る物もたり〜け  
たろき〜き見ぬる事〜もろ〜きと中は是  
退窟するなわばは比の響古いたとひ人よ〜  
まゆ〜ともま〜た〜か人里み〜て内よて  
一急の〜〜かん調子よて一急乃さうひ〜  
なわと志や〜ひよ〜けて結をきてぬ〜り  
かハ響古ある〜〜ひた〜〜ぬまい〜ま〜  
結と〜する〜一急〜〜調子〜〜〜と

い〜ちわう〜きをあて用〜し拍子よさの〜  
あ〜まい牙なわ〜せ響古物なりま〜〜急も  
そん〜さうなわ

二十四五景

一 ばくろりき一期の藝能さ〜ま〜めたわ  
ち程よけい〜れ〜ひなり急も〜  
かをりす〜も〜ま〜時分なりされまび  
るよ二の乃果報あり急と牙なりば二のい  
ば時分さ〜ま〜なり年〜さ〜りよむ〜ひ藝  
能乃成就も〜〜也さ〜とふ上〜  
き〜〜人目よ〜〜と名人あ〜  
〜も苗度の花よめ〜〜たちあひ

勝負あも一旦うつ時い人も思ひあけぬへし  
上よと思ひ志むるなり人すくすく一の  
あひひこ也こもま實れ花よはあひの幸一れ  
さうりともみる人の一旦こころ乃めつこき  
むすわま實の目きこい見まけへこれ此の  
むくそ初んとすろなるをきまめくる積よ  
ぬーのおりひてたまさかあくあうをこころ  
里ん世の仕部こころなる風神をするこころ  
あさましき事なわたり人一人もがめ名人  
かとこころあとも昇つこころめつこころきま  
なわと思ひさともつていあくおまの夜直し  
定めぬをたれらん人よまをこゆるふとひて

けいこころやまーよまへしきまこころ時分乃花を  
まこころの花と志るこころいま實乃花よ初とを  
さうるいなり只人よたは時分の花よはまひ  
座して花のうまるなま志る初んとすこころは  
こころの事なわこころ事して我位のちと  
ゆりくはねおまこころかとの花い一初ちる  
位よりう人の上よと物もへいこころあり  
位の花もうする也まこころはねへ

三十四五景

一 ばこころの終さうわ乃きこめなるまこころまてけ  
あしきまめさとりて堪終よなわおまこころ定て  
天下よゆるるま名座をゆへまは時天下れ

ゆるはまの不足よ名望も思ふがともあつくい  
つらあは上をわともいすこ海の花をきく  
めね仕まを知へしを程よあはれい三十四又  
またの比さりあは四十の事也あはれは比  
天下乃ゆるさまをいせは終をきためしつと  
思ふあはれい愛よてなをいしむへしははら  
きさめいはいはは天下のゆるさまをえんる  
あはれいゆるさまをいしははれいをたがえ  
まはゆるさまのよてなをもさとはなり

四十四不感

一ははれい終のよて替るあはれい天下あ  
ゆるされ終よ得は志くわはれいあはれい

よきくらき乃仕まをものへ終いさうらひ  
ちくくあくやうく年一はけぬまの牙の花  
も終あ同乃むをうすりなりまくれは  
表男い志くはよきかとの人もひと面れ申樂  
年一はりていみうまねたなりち終りこれ  
一ははれいけこりこれくあはれいさのこは  
あはれいあまのいまま一きなりあはれいあ  
終をよまくとあはれいあはれいあはれい  
むをものせあひらひてあはれいとあはれい  
たとくの日まの仕まあはれいあはれいあ  
あはれいあはれいあはれいあはれいあはれい  
あはれいあはれいあはれいあはれいあはれい

うせさうぞ花をそまことの花をてしるへきれ  
るも五十七ちかくまて失さうぞ花をたしる  
はまあるい四十都集なり天下乃名聖也た  
へしたとひ天下のゆるはまをゆるるまて  
ともた棟の上まのいもた我身成知所へけ  
れくまきのの上まをたしあまきののまり  
身をくきそあんの見ゆへき終をすまきな  
わくまはあるまのたしる人乃んあるへし

五十卷

一は比よりいおかうこそぬあうていよこ  
いあま麒麟も老おまの警馬もたはふと  
事ありさりなりうまもにたらん能志

たういお敷うせそ善悪見とそあいまくあ  
とも花いのこたへし七父もてらひもの  
又十二とや五月十九日ま死せしり五月乃  
四日駿河の國浅沼の清おまては樂つまつり  
そ目のさふあくとた花やうまて見おの上下  
一回まかうひせしなりんまろおうはなを  
初いよゆつりてやすきとそあ成すくあく  
澹ててり花のいやまは見えなは是  
はもれははる花なるりゆへは枝葉もま  
あく老本みあふまて花らうておまなり  
まのあうわは老骨まおまの強粉也  
一うひをゆる事先あひ人の口はき

ふつぬあひひの師匠たかく洞子をうわくひ  
あひひの人いひきくうふ物なわも子あひ  
いまこ念ゆきまねるい師匠ゆふを身よ  
まこうまをふく何なる也なふ人のたぐ  
つけくひの字章のくひよままきま師匠乃ふ  
んくまうするまもうよふのふ一坂なをま  
事一あふぬ物なわこれうらつけ肝要よ  
まこあひひの人たぐくははきまよまこうひ  
次才くうひきく習ひん人よたかくうん  
するもの也習ひん人のうひのふ一あ一坂  
まこ入ふなまうんたあ也

一 吉昌のまうひやう二ツろよまこ一うひの

本をわくひとの曲をわたて文字うつりな  
うはくくはくはくはくまこまこまこま  
あ一をつけて文字改わくくま事一文字よ  
よりてあわよ成て不書くくくうらり  
又字くまのす急換ますくしてゆくくと  
る換よあ一をいつけまなわさくままま  
うれ曲をわたしてうこへい曲乃はけや  
お應してままなわ物の一ろきわんあふ  
まこまこまこあ一の付やうをまてまこひの  
まろせまひ文字うひのうひくくすまふ  
らわは曲よ似合くうらわらまはなるなわ  
あ一いこまあくまい文字うつり曲い也



かよきしきも氣もたあしきふしきふしと  
いふ同し文字をいふ時習ひやう別  
なわ警言よいたくかやわをきて曲を志  
曲を志て調子を志て調子をわされて拍子  
志とつり又律をかよきまう文字を  
わゆるしき事かんやうなわ  
一し志を行ふ事かやむきころの時をう  
かよしとあ乃こさりあしきころも行く  
ころはよ薬をのむしきころあ乃よくある

かよしきも氣もたあしきふしきふしと  
いふ同し文字をいふ時習ひやう別  
なわ警言よいたくかやわをきて曲を志  
曲を志て調子を志て調子をわされて拍子  
志とつり又律をかよきまう文字を  
わゆるしき事かんやうなわ  
一し志を行ふ事かやむきころの時をう  
かよしとあ乃こさりあしきころも行く  
ころはよ薬をのむしきころあ乃よくある  
かよしきも氣もたあしきふしきふしと  
いふ同し文字をいふ時習ひやう別  
なわ警言よいたくかやわをきて曲を志  
曲を志て調子を志て調子をわされて拍子  
志とつり又律をかよきまう文字を  
わゆるしき事かんやうなわ  
一し志を行ふ事かやむきころの時をう  
かよしとあ乃こさりあしきころも行く  
ころはよ薬をのむしきころあ乃よくある

ういひあうつき又地し急よ曲舞三の四の襷  
おさめよ調子とおきて小淫三のちとたあぐ  
ういひさして何まても食をうと用へしさあぐ  
ういひういひるあうへ里外ものなり志よくを  
月夜も秘すなりお十日のわけゆくきせのういひ  
らんいこゑうは物なりをもときし色をつらひ  
ぬきうへに終おつらなりわん也あつら一警古と  
中い友百白うん三十日こそ道をりふとあはけ  
冬のうち中なり

一けいこけつてとうちよいまむらぶあ一よ  
男なりをうへあめあ二よらせのあきこも一よ  
うへあむへ一あふをあつら一まへくあきこ

あうよこころかへ一屋し急のたうきい  
りや一きものなりを急よせいを入まへあ  
なりくつあうがよらせああつても志こほき  
おなりあ四よきさのるういひのめりうわ  
あ一あもあさくひきくさへしあうこいひの  
きさこいひきく打へ一たうきい一うあも  
まきあ一あうんう一まへくりや一き物なり  
又一志こほきさうなりんあへいま一む  
あ一まこあつてい一あうちよなるいこも  
う一ま一き也あけときさくと陰陽和合夫婦  
なりまこ一阿時の二字よも是をたへんおと  
きさまなとりあうせあふうへ一是陰陽

和合とわきささと成あかくけけたらん  
おつよとつろよとのおつよつとへつと  
よと人地のふちとあと成さまのつと必  
うまき也越別よ乃まんのよ曲のまんの  
曲とよをうとんまんのよはよと似とる地を  
うとまきさそのよ成うたんと地もつとあ  
地を越よ打し又越よりうのよ成うとんと  
思つよ此おの地をまきさよと打し左横よ  
うちよけよのよよあきんうちよ乃いせい  
あつておんある地也よと秘も也大小り  
うきとる地也よとつよとこのなり地も  
あきとるははは法藝よわとるへは返鼓乃

卷よとつとあり

一 越よと法藝乃藝古れに持けいこをアれと  
よ界をつとよは是法藝のよもち也  
一 萬年よと志とつとひ藝乃のよもち十七八のよ  
またいつよよもつと花の法をむ横よはたつ  
二十四よと三十四よの内いつよふも花れさつり  
たつとよよはたつと四十四よと五十よは花乃  
さつりすきやう厚くつち成るもちなり  
とちよつとよ花の法るうとつとふとひて藝成  
よへ一五十四よと六十よとたつと又二十四よと  
うへよとわくもやうふけいをまへしつや  
手付かいちつともおち藝のうきとあくなむ

き時分をさしいつふもわりのき花やうけ  
い持んをてい藝わうき時乃才分もきとえ  
見しぬものなるわ六十すき徳藝酬酢も人  
るををまてわして七十すも藝をまれい  
わうき時乃才がえまてうなる物なり返く  
いひし

一能をゆる事一番は仕舞成をへよさて  
やうく仕舞れがえう時二番は才なりを  
なをせねくせの太才をわうるとき仕舞の  
位をうめようやうは位をわてをへは  
事師通する志の秘事也一番より百多も  
えうけおをへう六十すうくれうて覚るま

退寮して藝わをゆ物也びいけ肝心也梅  
二三番ありうけうり製末面ゆくまたせ製末  
あつうひ面位成をへへ

一笛ハ才一十二志うりをおかえさせよ才二  
うつりをあ成せ才三鼓をわがえさせよ才四  
うひ成れがえさせよ才五仕舞心を知らせよ  
とくく才一仕舞心をくハよ乃うきあうり志  
とくうりまうなるへ言ハ漸く入へし  
返くかう竹めて吹るうぬ物也維志うく  
あうひ成れとき竹めて吹たうる肝心也  
一大小竹よつをへやう乃素ましかまへ  
くせよあうり屋し志よあぬハ数を知んる

おがえさせせし小はく見うち覺たらんときよ  
あがり鼓をかをせよあがりわきせ鼓乃高ちうふ  
ゆの也うれみこひときいほとありわてきこ  
ゆるもの也さそそ次よかま人を存鼓をへし  
又いま人を里らんいんわん鼓見事し  
みくる物なわろれつきみくせ鼓をかをせろれ  
のちふやう急鼓をかをすへしてあがりわん程  
自然とやう急いひとありある物也さそめば  
ほこよをかをへあけろてよりあち位を清くあ  
へしまろく大才の次才はふ也よめ初心  
より何色りとも一交よをかをへんいん進り  
わけて清くみあがりぬをか又をそくたをへ

久いんせ身なわかをらば見あをせの時分  
うんようなわ

一太鼓をゆりて是も大あつとて同おをか  
先うめ二三番程わがゆるうちいより清鼓  
をかをへんそうちわをかえさせに付る時分よ  
をちの持やうかま人鼓をかをへてそはりけ  
し急をかをへそ次よくせをかをへ也たらや  
くせをかをへんいん進よひの進えけい  
ありぬ物也そは雨よまをうこまへ  
うめ地うう小おがえさせうちりよと  
をへん人あ太鼓のわらわあうくならぬ  
あううゆきん時分よ味鼓をへあち大形

ゆきころおわりし位ををゆへしうやう此  
位と見合肝判なり

一狂言をへはるすまらうしめ初心なる時ハ  
つよもたうし人乃見しひんやうよをへ  
る物也さしてわく狂言をも志たかえ如形仕る  
時あまわたりしき事一をうくとりしき狂言  
ふこを入面白きをませへしそはちや年も  
ゆきふらんよき事とす時いふおも物すく  
たふうしましくあき換る志んうしてくつこ  
れうしきことを入ととりし換よむること  
是上よのりき也狂言の次才大才めは

一よろしきの狂言の事一よよと心のむきしんり可

なすふへし氣のむりさけつけいこする事  
しこのおの徳藝の毒なり

一狂言の役志のお人をいあまう狂言の度あへ  
よわりしぬ物なり才一人進りましくして狂言  
さすぬものなりや一は狂言よりものふり  
狂言とりまけみとらあき物也うんましく  
志らうとあよまれいけいよ物の一ろまよ  
あけまいつこらきあくものあしちあとする  
ものなりしうあもけいひろううあまるものなり  
才一毎のうち言の中なととわまけいこい  
志む物なり地うらひ二三人彌子ひきくうん  
とせつし手拍子口笛よせけいこまへ一大勢

ありていともや——もまきまを越さるる大の  
おかえりて本のたむしめつけいこまへし

一 狂言のあひひの事—中入の仕手乃ソてこちも  
かへりへままれ入まはあかくわさ物なるわ  
ままのわりんもねたま乃——く人乃あひい  
ら——かくわさる物なるわこれらけ肝要也

一 ねたまき物—能を——ゆる事—あまわりふしひ  
くる能返を——ま——き事—也又物もてうけ  
す——ていせいのあまき能回おたわりソくおはは舞  
ねたまきまを——ゆ——あまわりこまらなるもの  
ままひいせさへんま——き也

一 警古よりあ——き役志よりままひいりこまら此外の

毒なる仕舞よりきくら大つこま小けを留まら  
るろきあひひもとまや——くくもさうりそ上  
わろきくらせむ物也似合ふはあひひは警古乃  
ときうま——く——ある物あて作らまことまやま  
へし物まよりまうんとあひてまなわかすい  
こま一のくすりなりあて我らりま志こと  
あひてまなわたます事—物も——ろくたう——を  
まらまへし一の毒とらばるる也

一 警古は調子たかくうこまぬわのなわらうひ  
けいこまらるる平調なるものふけいこまらるる  
双調志うたへくる

一 警古のうちま終りてもうこまひまてもんを——

みてもおきうれ能すきさばあひく湯茶をも  
乃ますうち乃人とも物をもいついよはよて  
らつてううそくの志んをえあつ火をうき  
たけの事一もきぬ也一番すきそりきひて  
稽古いすこも一まうぬるは羽をもかあんで  
湯茶をもものよはさういとゆ火をもあきこ  
うそらうそく乃志んをもとわううくまは  
しそてけいこをうむへしこきけいこれ  
時乃は交わゆる所の事一さあへいこあ  
うつりけいよまきゆいよち見きのは度な  
うこめこり

一次才り一地をとば事一す急乃のふよはとば

うら

一能の仕舞けいこれる小袖をながおりまひ  
あふへし又あふ時いあつてかぬまてまひ  
なふへしこやうよらんい度愛舞と能との  
たのりあるもの也ゆき舞よは仕舞をまく  
あくうくとそ文句ようを付へし拍子成  
たくさんよあを教をまをゆことる百あも也  
一響古の時製束よてまふ事一うめより製束  
みてまふいあき也三番やとむねをえうて  
よめ製束あくけいこ志やうそくあつうひ  
をもあふへし又面成りけり事一右と同あ  
二三番ねがえうてよめ面をうけうれおかえ



ころの能を舞んで面位れかえへし、まゝと云ふる能をうめて、藝古もろみめん、故うけころい  
うやうのいねとく、いねてけいこ、いねいひと  
きい、藝能ありころこととや

一 げのいみと云ふ、い自然とゆきころりよりけい  
こい、初い、まてころりのいけてもきる、故き  
そこあひ、藝をいひさせたり、はる才一乃あ  
きま、一也、名人の子あとも、いもき、まを  
ちり、ころとも、ま、才、此、藝、初、い、る、い、ろ、れ、藝、の  
い、け、あ、と、い、お、應、一、て、い、ひ、き、せ、へ、し、お、應、り、  
ち、つ、ま、こ、い、ひ、ころい、ま、そ、あ、あ、き、あ、き、ころり、也  
一 座、あ、終、舞、臺、の、能、ろ、や、一、も、ち、更、も、た、か、き、り、

か、つ、り、あ、り、す、く、藝、古、ま、へ、し、大、あ、い、舞、臺、あ、て  
す、り、わ、き、い、大、き、よ、り、り、と、と、藝、を、ま、へ、し、座、あ  
ま、て、い、こ、ま、う、い、藝、故、ま、へ、し、

一 藝、古、り、ころり、い、く、物、故、い、ね、人、の、よ、き、藝、志、よ  
あ、ひ、て、の、あ、い、き、あ、く、けい、故、あ、聖、ま、る、ま、一、是  
大、き、な、る、あ、い、つ、け、な、わ、あ、い、き、る、を、あ、て、取、聖  
ず、る、ま、一、同、あ、也

一 初、い、なる、人、乃、わ、ま、こ、り、上、よ、なる、けい、故、や、う  
つ、ん、せ、ぬ、もの、な、り、

一 藝、古、を、ま、き、い、め、何、も、て、も、一、藝、仕、承、人、の、又、あ、ま、こ  
こ、ま、い、余、余、れ、辱、く、よ、お、る、ま、一、あ、く、く、い、ま、  
め、て、ま、へ、し、い、我、才、の、本、藝、臺、あ、き、く、な、り、

一つは太鼓笛等もてまへけりい上子もてかきり  
あしとくして人乃きりひる流ありた横乃藝志  
まは終なきもやさへへあしひも人乃藝習ひ  
る事一うんましく無判なわもきこといなる  
うさくあしきりいなるもてより一世の君  
うせりぬる物也たえいけいいあつきなる  
よきあしりを本と一警古まへ

一形とあき人よりあてをへた終のす小楯  
陸政終太鼓揚貴妃誓彩る花月夜榮照るも  
あしりあり西王母は形也よる

一徳藝いささ家時よまうせ仕交るいさ  
るりしものお乃けい乃毒也りりさめは一産

一志やうも藝をいける人の仕る藝なわ  
志つけくは海ことの時つてたう家物也よき  
事いあすすなわらあしきすいたやく  
なわよくふせよくうせりぬる物也  
いむへはく志むへし是よまそけいをたれ  
とアれをつととおひく人とは古人の尸  
つへるまもはは儀をわ何事一う名人乃中  
なうまもよあさなる儀いんり子ともとわ  
りきりやう乃の持物もろくもま達の時愛を  
せんともあそくうろせたく也よも  
せくも藝あうぬ物もてかろまは依てこれを  
つとと思ひく人とはは儀をわらまはる

つひと思ひいふに思ひこゝろ一藝よりきあり  
も可乃志よきお集る物なりこゝろ初心の人は  
物の一ろきをへこのろちなり

右響古の糸く三十五ヶ糸巻よりき  
志ゆ一作是をめてよくわたりけ響古  
まへに響古の糸くいとて只はめりけて  
まへにまてまてに藝ありす  
まへにまてまてにゆく也よくそち候わたり  
けいこせれに糸一なりやすくけいこ  
まへにあり候ものみくは



横山 重

